

特別講演 「The Tradition and New Perspectives of Ukrainian Poetry」

古宮路子

古宮ゼミは、2025年11月18日(火)6限に、総合文化研究所会議室にて、ウクライナのポルタワ教育大学からいらっしゃったゲストによる講演会「The Tradition and New Perspectives of Ukrainian Poetry」を開催した。登壇したゲストは、副学長のヴァシーリ・ファザン教授、オリハ・ニコレンコ教授、カテリーナ・ニコレンコ講師の3名であった。ゲストの方々は、埼玉大学副学長の野中進教授の科研プロジェクト「ウクライナの文学教育への協力を通しての世界文学研究の発展」で、11月10日(月)～11月24日(月)の間、来日しており、埼玉大学や本学のみならず、慶應大学、上智大学、清泉女子大学、京都大学でも、「ウクライナ・ウィーク」と銘打たれた一連の講演会に登壇した。講演のテーマは大学によって様々であり、例えば、ウクライナの若者文化、教育支援、宗教思想と戦争、戦後復興とメンタルヘルス、といったテーマが取り上げられた。本学では、ウクライナの文学、とりわけ詩をテーマとしてお話をしていただいた。

講演会では、まずファザン先生に導入のスピーチをしていただいた。その後、2つのレクチャーがあった。1つ目は、「Taras Shevchenko and his significance for Ukrainian society」というタイトルで、ウクライナの伝統的な詩について、オリハ・ニコレンコ先生とカテリーナ・ニコレンコ先生の2名が共同でお話をなさった。タラス・シェフチェンコ(1814-1861)は、19世紀に活躍したウクライナの国民的詩人である。帝政ロシア下にあった当時のウクライナで、農奴の家庭に生まれたシェフチェンコは、絵画と詩の才能を認められ、ペテルブルクの文化界で注目される存在となった。当時、文学作品はロシア語で創作されることが通例であったが、シェフチェンコはウクライナ語を用いて、民族愛に満ちた詩の数々を書いた。シェフチェンコの創作と社会における存在感は、ウクライナ民族の独立を危惧する政権に危機感を抱かせることとなり、彼は3度も逮捕され、ウクライナの土を再び踏むことを許されないまま、ペテルブルクに没したという。

2つ目のレクチャーは、「Modern Ukrainian poets, their creative and public activities」というタイトルで、現代ウクライナにおける詩をめぐる動向について、カテリーナ・ニコレンコ先生がお話をなさった。まず紹介があったのは、1985年にリヴィウで結成された「Bu-Ba-Bu」という詩のグループである。このグループは、ユーリー・アンドルホーヴィチ(1960年生まれ)、オレクサンドル・イルヴァネツ(1961年生まれ)、ヴィクトル・ネボラク(1961年生まれ)の3名による。グループ名の由来は、БУфонада(buffoonery)、БАлаган(puppet show farce)、БУрлеск(burlesque)、によるという。「Bu-Ba-Bu」の詩人たちは、ソ連時代に公式の芸術規範となっていた社会主義リアリズムを批判し、自由なウクライナ語による創作



を志向した。そして、チェルノブイリ原子力発電所事故の衝撃に苦しむ1980年代のウクライナ社会に、力強いメッセージを発信した。次に、レクチャーでは、ソ連崩壊とともに始まったウクライナ・ポストモダンが紹介された。この文化潮流は、中心地となったイヴァーノ＝フランキーウシク市（旧スタニスラフ市）にちなんで、「スタニスラフ現象」と呼ばれたという。一般的に、ポストモダンは1960年代後半から始まったとされるが、「鉄のカーテン」によって文化的に遮断されていたウクライナでは、ポストモダンは90年代のソ連崩壊の衝撃とともに起こり、グロテスクと風刺を特徴とした。代表的詩人の1人に、ユーリー・イズドリク（1962年生まれ）がいる。2つ目のレクチャーの締めくくりとして、現代ウクライナで特に大きな影響力を持つとともに、全ヨーロッパ的に注目されている詩人セルヒー・ジャダン（1974年生まれ）が紹介された。ロシアによる侵攻下にあるルハンシク州出身のジャダンは、詩や小説の勢力的な執筆、音楽活動等によって、ウクライナ民族の結束を呼びかけるメッセージを強力に発信し続けてきた。ジャダンは音楽から創作のインスピレーションを受けており、自身のスカパンク・バンド「ジャダンと犬たち」を率いてコンサート活動も行っている。彼らは現在、ロシアとの戦いに従軍しているという。

外語祭前夜の講演会開催であったが、会場には、東欧の文学や芸術に興味のある学生や教員が足を運んでいた。学生からは、ウクライナの若者層による詩の受容や、シェフチェンコの生涯をテーマにした映画などについて、質問が出た。現代の日本では、どちらかというと詩よりも小説の方が、文学のジャンルとしては人気と影響力が大きい、というのが、古宮の私見である。だが、ウクライナでは、散文も人気がある一方で、詩もまた、古典からポストモダンに至るまで、文化の基層を成していると感じた。ウクライナで盛んな詩の文化は、いわばロシア文化に対するカウンター・カルチャーとして発展してきた経緯がある。帝政ロシア下でウクライナ民族への愛を謳ったシェフチェンコ、ソ連の公式文化に対するアンチテーゼとして自由なウクライナ語による創作を行った1960年代生まれの詩人達、ソ連崩壊後にウクライナ文化界の新たな牽引役として綺羅星のごとく登場したジャダンなど、ウクライナの詩の文化は、常に、周辺の大国とは異なる自らのアイデンティティを、強力に発信し続けているように感じた。

特別講演 「The Tradition and New Perspectives of Ukrainian Poetry」

日時：2025年11月18日（火）17:40～19:10（6限）

場所：東京外国語大学研究講義棟422室（総合文化研究所会議室）

登壇者：Prof. Vasyl Fazan, Prof. Olha Nikolenko, PhD Kateryna Nikolenko

言語：英語

主催：日本学術振興会科研費「ウクライナの文学教育を通しての世界文学研究の発展」

共催：東京外国語大学古宮ゼミ

協力：埼玉大学多文化共修センター

Special
Lecture

The Tradition and New Perspectives of Ukrainian Poetry

Speakers

Vice President, Prof. Vasyl Fazan

(Poltava V.G. Korolenko National Pedagogical University)

Opening Speech

Prof. Olha Nikolenko, PhD Kateryna Nikolenko

(Poltava V.G. Korolenko National Pedagogical University)

Taras Shevchenko and his significance for Ukrainian society

PhD Kateryna Nikolenko

Modern Ukrainian poets, their creative and public activities

Date & Time

Tuesday, 18 November, 2025 17:40-19:10 (GMT+9)

Language
English

Venue

Room 422 (Conference Room, Institute of Transcultural Studies),
Research and Lecture Building, Tokyo University of Foreign Studies

Organized by

JSPS KAKENHI Grant Number 23K25312「ウクライナの文学教育を通しての世界文学研究の発展」

Co-organized by

東京外国語大学古宮ゼミ

Cooperated by

埼玉大学多文化共修センター

Contact: Michiko Komiya (komiya-m[at]tufs.ac.jp) *[at] should be read as @

The poster design uses a drawing by Veronika Chornomorets (14 years old) from Zaporizhzhia.

科研費
KAKENHI